

科目：日文作文

系所組：日本語文學系碩士班

以下の文章は、別役実氏（以下、別役とする）、鶴見俊輔氏（以下、鶴見とする）、梨木香歩氏（以下、梨木とする）三名による鼎談の一部です。次の鼎談を読んで、以下の間に答えてください。

別役 ただ、付録にしろそうでないにしろ、ストーリーが組まれて、それでその領域を楽しんだあるいは領域に開放感を感じたという意味での、素朴な物語は失われているだろうという感じはします。それでも、例えばゲームの中だとか、それから情報化の中でも、何らかの形で物語を求めているとは思っています。

パソコンネットワークでの対人関係の探り合いみたいなものは、やっぱりある物語を求めているのだろーと思います。ただ、それがどういう形で成就するのかというのが難しい。

近代に入って以降、幼児教育からすでに情報教育になっているんですね。例えば子どもが「アリ」を見て、これなんだろうと思う前に、「ほらアリさんよ」って教えられてしまう。子供は「アリ」という言葉を先に覚えて、その言葉を通じて、「アリ」本体を認識するわけです。まず、最初に体験して、その体験した世界に対して言葉があとからついてくるのではなくて、言葉を通じて世界を体験するというふうに変ってきている。

僕らの時代は、言葉はそれほど多くなくて、言葉で全てを把握しなければならないということもなかったから、体験したあとに言葉をつけるという余裕があった。言葉そのものが、ものについての記号ではなくて、何かを表現するための内部的衝動を、言葉にしたわけですよ。内部から絞りだすものに手がかりを与えるのが言葉。言葉の発生そのものが違うわけです。だから、昔は言葉が出せないどもり*¹なんていうのがいっぱいいた。自分が見たものに対して、どういう言葉を与えていいのかわからないということがまだあったわけです。ところがいまは、どもりも少なくなりましたからね。言葉というものが自分の外側にすでにあって、この言葉とこの言葉を持ってきたらこういう意味になるという具合に決まっている。言葉を通じてしか世界を理解していない。そういう逆転が行われる。事象より前に言葉が入ってくる。これが始まると言葉は理解できるけども、直接的に世界を感じる感受性というものはなかなか育たない。それが恐らく問題です。

①それと同じことが物語にも言えて、物語られた事象を読み取るのではなくて、物語を情報としてしか読み取れなくなっているわけです。

梨木 テレビゲームなんかでも聖杯とか、いろんな宝物を見つけるというので、物語のかけらみたいなもの、雰囲気みたいなものは残っているけれども、その物語の全体性みたいなものが、

そこにはないですよ。

別役 ないんですね。情報化社会っていうのは、情報の解読をしていきたいと思いますところ、主眼があって、それが局部対応である。総合対応ではなくて、この情報にはこういうふうに対応しましょうと、情報がたくさんあればあるほど、局部だけで、対処療法だけである一定の時間を過ごせるわけです。これがやっぱり物語のダイナミズムを失わせている。細かい物語しか我々が体験できなくなっている。そうすると、どんどん物語の中に閉鎖されてしまうんでしょうね。情報っていうのは全体構造から出てくる、ある手がかりみたいなものなんだけど、そうではなく、情報自体の中に一人一人が閉鎖された環境を作ってしまうと、閉鎖された環境の中でのダイナミズムしか負わなくなったというそういう問題があります。

ただ、依然として物語志向というものは根強くある。それはやっぱり物語というものの強さだろうという感じはしますね。

梨木 メディアが、白装束の何とかを追っかけていく。そういうものをTVで見ている、やっぱりみんな物語性にもものすごい飢餓感があるって、物語が欲しいんだっていう感じが、世の中全体にするんですよ。

何かへんなものを見たいとか、そこに何かあるのか知りたいというのが人間には根本的にあって、毎日の変わらない日常に対して、こちらがその気になって精神を立てて、よくうちの犬が、なにかあると、カッと毛をたてるんですが、そんな感じで向かうと、そこで、なにかしら向こうに見えてくる、もののけ^{*2}のようなものが何かあるような気がします。どうやって、そのものの気配を、しっぽをつかむ^{*3}かって、そういう感じですよ。

編集部 ②なぜそうまでして、私達は物語を求めているのでしょうか。

*1 どもり：吃音

*2 ものけ：物怪と書く。その正体が明らかではない、いわゆる幽霊やお化けのような怪しいもの。

*3 しっぽをつかむ：尻尾を掴む。他人のごまかしや悪事の証拠をみつける。

<出典：座談会「物語をめぐる」鶴見俊輔・別役実・梨木香歩『母の友』（2003年9月号）>

<問題>以下の(1)、(2)の問いの答えなさい。

<解答書くときの注意事項>

- 1) 行30字で書き、要求した字数を守ること。
- 2) 所定の用紙に縦書きにすること。
- 3) 解答が字数および要求した形式に当てはまらない場合は、日本語読解能力および基本的な研究分析能力が不十分であるとみなし、総合点より20点を引くので、注意すること。

※ 注意：1. 考生須在「彌封答案卷」上作答。

2. 本試題紙空白部份可當稿紙使用。

3. 考生於作答時可否使用計算機、法典、字典或其他資料或工具，以簡章之規定為準。

(1) 下線部①でいう「物語られた事象を読み取る」のではなく、「物語を情報として」読み取る>ということはどういうことか。この鼎談で別役、梨木が語っていることを参考にして、100～150字で説明せよ。(30%)

(2) 傍線部②の部分で、「なぜ私たちは物語を求めるのか」という問いが出されている。その問いに対して、梨木、別役、鶴見はそれぞれ次のように述べている。

梨木「絶対答えのないような問いを人間が自分の核に持っており、説明ができないことを物語が答えを出してくれ、何かが納得できる」からだ。

別役「物語というのは要するにある事象なり、人物を理解するための文体、方法」であり「物語によって我々人間と世界というものが常にコミュニケーションする」ためのものだ。

鶴見「これからの物語というものを考えていくと、漫画というものは無視できない」

では、あなたは、なぜ人は「物語」を求めるのだと考えるか。どのような角度からでもよいので、必ず「物語」というものを定義した上で、500～600字程度で、あなたの考えを述べなさい。(70%)

※ 注意：1. 考生須在「彌封答案卷」上作答。

2. 本試題紙空白部份可當稿紙使用。

3. 考生於作答時可否使用計算機、法典、字典或其他資料或工具，以簡章之規定為準。